

ジョン・スタインベック

In Dubious Battle 研究

當 麻 幸 子

ジョン・スタインベック (John Steinbeck) の作品には、あまり多くの女性は登場しない。しかし、彼の描く女性は、しばしば周りの登場人物に大きな影響を与えている。『怒りの葡萄』(The Grapes of Wrath) (1939) のマ・ジョード (Ma Joad) をはじめ、『赤い小馬』(The Red Pony) (1937) のルース (Ruth) や、『エデンの東』(East of Eden) (1952) のキャシー (Cathy)、そして『二十日鼠と人間』(Of Mice and Men) (1937) のカーリーの妻 (Curley's wife) などが、その例である。

それでは、『疑わしき戦い』(In Dubious Battle) (1936) においてはどうか。やはり女性の登場人物は少なく、印象に残るのはおそらくリサ (Lisa) ただ一人であろう。

そこで、リサについて分析し、スタインベックが彼女を通して何を語ろうとしたのか、また、スタインベックにとっての女性像とはどのようなものなのか、探してみたい。そして、この作品のテーマは何なのかを研究することにする。

まず、『疑わしき戦い』の中でのリサの描かれ方を見てみよう。

彼女が最初に登場するのは、初めてのお産に苦しんでいるところである。そこにマック (Mac) とジム (Jim) が現れ、彼らは人々を団結させ、ストライキを起こすきっかけを手に入れるために彼女を助ける。ベテランの共産党員マックは、新米のジムに

We've got to use whatever material comes to us. That [to help Lisa] was a lucky break. We simply had to take it. 'Course it was nice to help the girl, but hell, even if it killed her--we've got to use anything.¹

と語る。また、しばらく後の二人の会話は、

"How's the girl [Lisa]?" he [Jim] asked.

"What girl?"

"The girl with the baby."

"Oh, she's all right." (DB, 80)

となっており、マックは完全にリサのことなど忘れてしまっている。リサはただ怯えるばかりのおどおどした女で、マック達に利用されているだけである。これらの描写を読む限りでは、彼女には何の重要性も感じられない。

それでは、出産後のリサはどのように描かれているだろうか。彼女の世界の中心は赤ん坊になり、ストライキのことなど何一つ考えない。ジムとリサの会話は次の通りである。

"You [Lisa] just sit still. All these things go on around you, and you pay no attention. You don't even hear."

"I wisht it was over," she replied. "I wisht we lived in a house with a floor, an' a toilet close by. I don't like this fightin'" (DB, 271)

また、バートン (Burton) とリサのやりとりも、

". . . What would you [Lisa] like to have to make you happy?"

She looked self-consciously down at the baby. "I like to have a cow," she said. "I like to have butter

an' cheese like you can make." (DB, 258)

となっている。

リサは、今自分の周りで起こっていることに全く関心が無いのか、それとも理解していないのか、いずれにしても社会の流れについていっていない。一見、非常に無知な女のようなのである。しかし、別の見方をすれば、社会の波には左右されずに、自分にとって一番身近な、小さい単位の世界をしっかりと守るしたたかさを備えているとも言える。

さらにストーリーが展開すると、ストライキの成功が全てとなり、人間性を失いつつあるジムの心をも解きほぐすほどのあたたかさを、リサは持つようになる。それも、始めは

Jim sat down beside her. "I like to be near you," he said softly.

"Don't you come none of that."

"No, I won't. I just wondered why it was warm beside you. . . . I'm telling it [the whole thing] to myself, but I understand it better with you listening. . . ." (DB, 318)

というように、一方的に歩み寄ろうとするジムに対し、リサは逃げ腰であるが、後にはリサ自ら赤ん坊を抱いてジムのテントへ赴き、

"I [Lisa] thought I'd come an' set. I like to--just set here."

Jim smiled. "You like me, don't you Lisa?"

"Yes."

"I like you, too, Lisa." (DB, 344)

と語り合う。そしてそのときには彼女はむしろジムよりも落ち着いており、
“Look how the evening’s coming. We’ll light the lantern
before long. You [Lisa] wouldn’t like to sit here in the
dark with me [Jim].” (DB, 344) と言うジムに対し、“I wouldn’t
care,” (DB, 344) と答えるまでの余裕を見せる。

以上の経過を辿ってみると、リサは出産後には物事に動じない、しっかりした女性になっていることが分かる。彼女はどんどん成長し、丸みのある大きな人間になっているのである。とはいえ、やはりストライキとはまるで次元の違う世界に住んでいることには変わりはない。彼女の言動を見ると、『疑わしき戦い』がストライキを描いた作品だとは言い難い。

それでは、スタインベックはリサを通してこの作品で何を伝えようとしたのだろうか。ジャクソン・J・ベンソン (Jackson J. Benson) は、「朝食」 (“Breakfast”) (1936) と『疑わしき戦い』の関係について、次のように述べている。

Often thought to have been a warmup for his work on *The Grapes of Wrath*, its composition preceded by two years the earliest research and by three years the earliest writing that Steinbeck did for *Grapes*. Actually, this very moving and very real scene-- it is little more than that--came out of his preparation for *In Dubious Battle*.²

これは、「朝食」で表されたスタインベックの精神が『疑わしき戦い』にも引き継がれたという点で、非常に興味深い。つまり、『疑わしき戦い』は、「朝食」同様、ストライキが多発した時代に舞台を設定してあっても、

ストライキだけを描いたわけではないということである。

「朝食」は、スタインベックの短編の中で特に短い。その内容は、とある日の早朝、見知らぬ者同志の交流を描いたもので、大事件は何も起こらない。ある男が道端でキャンプしている家族に出会い、朝食をご馳走になる。その男は、綿摘みの仕事を紹介してもいいがという彼らの申し出を断り、別れていく。ただそれだけの話なのである。そこにはストライキそのものについては何も描かれていない。生きていくのが大変だったであろう時代に、赤の他人同志が交流する、ほのぼのとした人間のあたたかさを描いた作品である。

「朝食」の登場人物が年配の男だけでなく、若い夫婦と赤ん坊もいるという点は重要である。時代はどうであれ、個人はしっかり生きているということを描くにとどまらず、彼らが次の時代へと生命を繋いでいることも表しているからである。

スタインベックは、この短編の件を『怒りの葡萄』の第22章で再び使っている。もちろん、全く同じというわけではないが、彼がいかにかこの題材を気に入っていたかはよく分かる。

『疑わしき戦い』は、1930年代のストライキが多発した頃を舞台にしている。大地主たちも苦勞は絶えなかつただろうが、労働者達の苦勞はそれ以上だったはずである。賃金を下げられ、生活の場を追われ、ストライキも思うようにうまくいかない。しかし、このような辛く、苦しい時期であってもなお、大抵の人間は生き延びようとするものなのである。

それを表しているのは、この作品での「食べる」ことに関する描写の多さである。

ここで、スタインベックが大いに影響を受けた聖書では、「食べる」ということをどのようにとらえているか、見てみよう。

For as in the days that were before the flood they were eating and drinking, marrying and giving in marriage, until the day that Noah entered into the ark, (Matthew, 24-38)

このように、食べたり飲んだりする行為は、人間が生き長らえるためには不可欠であり、聖書では結婚と並んで重要なものである。飲食と生命の維持とは、切っても切り離せない関係にあるのだ。

どのような状況下にあっても、大抵の人間は生き抜こうとするものだ。先に述べたが、この聖書の考え方を『疑わしき戦い』に当てはめてみても、説明がつく。作品の終盤、ストライキは成功する望みがほとんどなくなり、雨には降られ、食料も底を尽きかけてまともな食事ができなくなると、マックはロンドン(London)に不安を打ち明ける。“Try to get a little of that beef and beans into ‘em. They’re sick of it, but it’s food.” (DB, 331) ところが、後にロンドンが“You [Mac] was sure wrong about what them guys would eat. They cleaned us out. There ain’t a damn drop o’ beans left.” (DB, 338) と語るように、皆相変わらず食欲は衰えないのである。

食料に対する関心は、リサにもある。彼女はジムと次のようなやりとりをする。

Jim sat down beside her [Lisa]. “What’s that good smell?” she asked.

“Meat. We’re going to have lots of meat.”

“I like meat,” she said. “I could just about live on meat.”

“. . . They got limey beans, too. Not for now,

though.”

Lisa said, “I like them, too.” (DB, 246)

リサの場合、自分自身が生きるのにとどまらず、結婚、出産を通して次の世代へ生命を繋ぐ役割も果たしているから、なおのこと聖書のテーマ、すなわち飲食は生命を維持し、種を存続させるためのものという考え方にびったり一致する。

それでは、リサが母親であることに注目してみよう。彼女が出産を経験してから成長したのは先に述べた通りだが、同じパターンは『怒りの葡萄』のローズ・オブ・シャロン(Rose of Sharon)にも見られる。スタインベック文学では、母とは分別のあるものという考え方がされることがしばしばある。『怒りの葡萄』や『赤い小馬』、『真珠』(The Pearl) (1947)などに登場する母親達はその例である。

スタインベックの描く母親像について、ミミ・ライサル・グラッドスタイン(Mimi Reisel Gladstein)は次のように述べている。

Some of Steinbeck's indestructible women are a re-creation of the bountiful and nurturing mother of that childhood. In simplistic terms she is the mother we all want when we are sick or hurt.³

実際、『疑わしき戦い』でも、リサは自分の赤ん坊の世話に加えて、傷ついたダン(Dan)やジムの手当てを手伝っている。この包容力こそが、マックをも恐怖させたジムの非人間性を押さえ、ジムが死ぬ間際に人間としてリサと語り合えるようにしたのであろう。この作品で、ジムが最後まで人間性を完全には失わなかったこと、そして、それがリサの力によるものだ

ということの意味は大きい。

『疑わしき戦い』を執筆中のスタインベックの手紙を読むと、彼が何をテーマにしようとしていたのかよく分かる。1933年にジョージ・オールビー (George Albee) に宛てた手紙では、ファランクス (phalanx) について非常に細かい説明をした後、“I am going to write a whole novel with it [phalanx] as a theme.”⁴と述べ、同じくオールビーに宛てた別の手紙では、

I have my new theme out of all this [the phalanx theory]. . . . In fact it has covered my horizon completely enough so there doesn't seem to be anything else to think about,⁴

と述べている。

しかし、1935年1月15日にオールビーに宛てた手紙では、創作の方向が変わってきたことを打ち明けている。

You remember I had an idea that I was going to write the autobiography of a Communist. Then Miss McIntosh [agent] suggested that I reduce it to fiction. There lay the trouble. I had planned to write a journalistic account of a strike. But as I thought of it as fiction the thing got bigger and bigger. It couldn't be that.⁵

トーマス・カーナン (Thomas Kiernan) によると、スタインベックが作品のテーマを変えた理由は、次の通りである。

By the time he was well into it [writing *In Dubious Battle*], Steinbeck had discovered that his characters would not behave according to his thematic plan. His phalanx theory remained intact, but it seemed not to work as an envelope for his story of migratory apple harvesters and Communist efforts to organize them. When he tried to impose upon the characters behavior and motivation that accorded with his theory, the action became leaden. Finally he abandoned his larger thematic purpose and concentrated on letting the characters follow their own inclinations. As a result, he produced a different book than he had set out to.⁷

実際、スタインベック自身も

I'm not interested in strike as means of raising men's wages, and I'm not interested in ranting about justice and oppression, mere outcroppings which indicate the condition.⁸

と語っている。

つまり、スタインベックが『疑わしき戦い』で描いたのは人間なのである。あらゆる困難を乗り越えて生き抜こうとする人間の生命力に、彼は何より興味を抱いていたのではないだろうか。

聖書では、生命は女性と結びついている。それは、“And Adam called his wife's name Eve; because she was the mother of all living.” (Genesis, 3-20)という言葉から明らかである。エバは善悪の知識の木の实を取って食べたために、神に“. . . I will greatly

multiply thy sorrow and thy conception; in sorrow thou shalt bring forth children. . . ." (Genesis, 3-16)と告げられる。しかし、ともかく彼女は子孫を増やす役目は無事に果たすことができるのである。

スタインベックの作品の多くの女性は、母親になったときに偉大な力を発揮する。彼にとっては、女性とは社会に出て男性と同様に戦うものではなく、生命を繋ぐ役割を果たすものなのである。このように考えれば、始めはただおどおどするばかりで頼りなかったリサが、出産後に成長し、ストライキには何の関心も持たなかったにしても、しっかりした女性になったのも納得がいく。また、ジムのモデルとなった人物は、キャロライン・デッカー (Caroline Decker) という実在の女性だった⁹のに、スタインベックが創作の段階で意図的に男性に変えたことの説明もつく。彼は女性の偉大さを母親の偉大さとしてとらえることに集中するため、ストライキに参加する女性をあえて排除したのである。また、それは、リサをより際立たせる結果にもなる。

これまで、リサを通してスタインベックがどのような女性像を抱いているか、また、『疑わしき戦い』のテーマは何か探ってきたが、彼の思想の根底にあるのは、生命を維持していくことだと言えよう。

それでは、彼はなぜそこまで生きることに執着したのであろうか。

それは、スタインベックの両親の死と関係があると思われる。1933年に書かれた何通かの手紙を読むと、両親が相次いで倒れ、その看病と執筆に追われていたスタインベックの苦しみがよく分かる。しかし、彼はその辛い時期にあっても、なんとか前向きに生きようとしている。オールビーに、"It is more being written for discipline than for any other reason. I mean if I can write any kind of a story

at a time like this, then I can write stories.”¹⁰と語り、ロバート・O・バルルー (Robert O Ballou) に、

I guess we are all pretty tired. But it is good discipline. . . . I have no inclination to go away. That is a curious thing. I've always thought I would want to run away but I don't.¹¹

と書き送っているのがその例である。彼はおそらく、どんなに苦しくても、自分は逃げるわけにはいかない、生きていかなければならないのだと感じていたのだろう。そして実際、彼は創作に打ち込むのである。

『疑わしき戦い』で、スタインベックは確かにストライキを題材に扱った。ファランクスへの言及もある。しかし、彼が作品で最も伝えたかったのは、ストライキの物語ではなく、人間の物語なのである。人間は、あらゆる逆境に耐えて生き抜こうとする。その生命力のなんと強いことか。スタインベックは、自らの経験から得た強烈な印象を忘れることができなかつたに違いない。

『怒りの葡萄』でも、『エデンの東』でも、苦しみながらも生きていこうとする人間が描かれている。スタインベックは“*There would seem to be only one commandment for living things: Survive! Life has one final end, to be alive*”¹²と述べている。彼の中に根付いていたもの——それは「生きる」というテーマだと言えよう。

註

1 John Steinbeck, *In Dubious Battle* (New York: Penguin Books,

- 1992), 66. 以下この作品からの引用は本文中に DB と表し、ページ数を記す。
- 2 Jackson J. Benson, *The True Adventures of John Steinbeck: Writer* (London: Heinmann, 1984), 291.
 - 3 Mimi Reisel Gladstein, *The Indestructive Woman in Faulkner, Hemingway, and Steinbeck* (Ann Arbor, Michigan: UMI Research Press, 1986), 110.
 - 4 Elaine Steinbeck and Robert Wallstén, eds. *Steinbeck: A Life in Letters* (New York: The Viking Press, 1958), 81.
 - 5 Ibid., 84.
 - 6 Ibid., 98.
 - 7 Thomas Kiernan, *The Intricate Music: A biography of John Steinbeck* (Boston: Little, Brown and Company, 1979), 192.
 - 8 *Steinbeck: A Life in Letters*, 98.
 - 9 *The True Adventures of John Steinbeck* の 291 ページで、ベンソンはスタインベックが『疑わしき戦い』の登場人物のモデルとなった人達と出会い、話を聞いた過程を述べている。
 - 10 *Steinbeck: A Life in Letters*, 71.
 - 11 Ibid., 72.
 - 12 John Steinbeck, *The Log from the Sea of Cortez* (New York: Penguin Books, 1995), 199.